⑪ 北区上賀茂学区の取組

地域の「誇り」でまちづくりを

北区上賀茂学区では，世界遺産に登録された上賀茂神社やカキツバタで有名な大田神社など，豊かな自然と文化財などが豊富な地域です。学区では地域にある文化財等を利用し，賀茂季鷹（かものすえたか）歌碑の建立や神社との協働など多くの取組が進められています。これらの取組や目的を上賀茂自治連合会の藤井慶一会長，初田耕治副会長にお伺いしました。

初田副会長（左），藤井会長（右）

地域への関心を高めるためには

— 地域で愛着のあるものを活用してまちづくりを進められているとお伺いしましたが。

藤井会長　多くの方に自治会へ加入していただくためには，地域の方に参加の意識を持ってもらうことが第一だと考えています。多くの行事を行い，関心を地域に向けていただくことが出発点だと思います。私たちの学区には上賀茂神社だけでなく，その周辺の社家（しゃけ）（同神社の旧神官の家）の町並，「さんやれ祭り」などの伝統芸能，賀茂ナスやすぐきに代表される伝統野菜など，自慢できるものが数多くあります。それらを使って，多くの方と一緒に活動できる取組を行っていけば，自然と住民の方の意識も地域に向かい，参加の意識も高まると思います。どのようなものを使い，どのように取り組んでいくか，これを考えていくのが地域リーダーの役割だと思っています。

初田副会長　上賀茂学区には，先人から受け継いだ貴重な宝物が数多くあります。上賀茂神社ほど有名でなくても，それらを有効に使えば，多くの方に地域がより身近に感じてもらえると考えています。

藤井会長　多くの方に協力をいただき，やってこれたのが「大田の小径（こみち）」の整備や賀茂季鷹歌碑の建立などです。「大田の小径」とは上賀茂学区にある大田神社の裏手の小山にある散策路ですが，上賀茂を良くしたい，という思いで各種団体の方をはじめ，多くの方に協力していただき整備したものです。

地域の支え合い

— 地域の支え合いが弱くなっていると言われていますが。

藤井会長　地域の伝統行事である「さんやれ祭り」，「やすらい祭り」，また，地蔵盆や夏まつりなどの行事では，参加してくれる地域の大人や子どもたちが多数おられます。多くの方に地域の行事に参加していただけるように取り組んできましたので，その成果が出てきたようでうれしく思っています。

ただ，地蔵盆をするにしてもお世話をする人が必ずいるように，地域の行事は多くの方の支え合いによって行われています。最近目に付くのは，お世話されるのは良いが，するほうに回りたくないという方が多くなってきたように思います。これでは地域のつながりが強くなりません。互いに支えあってこそ地域のよさが出てくると思うのですが。

自治連合会は扇の要

— 地域の方の参加の意識を高め続ける方法を教えてください。

初田副会長　まずは，学区民体育祭や防災訓練など，年齢，性別に関係なく参加していただける行事を行うことから始めないといけません。そのあとに大切なのが継続です。参加し続けていただくことで地域へのつながりも自然と強くなっていきます。

藤井会長　学区内で多くの活動を継続するのは難しいことです。私たちはそのため規約づくりに力を入れています。規約をつくるときに活動の目的をしっかり決めておけば，その目的に向かってまい進できますし，各種団体との協力関係も築きやすい。自治連合会はこの協力体制の扇の要の役割となり，調整役と思って行動しています。

地域の皆さんによって整備されている「大田の小径」

⑫ 東山区六原学区の取組

地域への愛着を高めるきっかけづくり

東山区六原学区では，世帯数，子どもの数ともに減少するなか，「高齢者から子どもまで支えあう地域」を目指し，学区の夏まつりでの「子どもの炊き出し訓練」，手作りの成人式や町内会が中心となった「六原フェスタ」など多くの取組が行われています。これらの取組を進めるうえで，学区では事務局を作り，自治連合会の負担を減らしています。事務局が担っている役割などについて，六原自治連合会の菅谷幸弘事務局長にお伺いしました。

菅谷事務局長（取材風景）

取組を継続させる仕組みづくり

— 自治連合会の事務局の役割，目的を教えてください。

平成7年の阪神淡路大震災のときの事例を見ていると，災害の初動は地域が担っています。当時，六原学区には自治連合会がなかったので，「災害が起こった場合に，本当に対応できるのか」という思いから，町内会を主体としたまちづくりが始まりました。当時の若い方が中心となり，平成9年ごろから取り組みはじめ，地域内をまとめていき，「平成11年に暫定発足，平成12年に正式発足」という日程をあらかじめ設定して，規約などを整えていきました。

また，平成12年の自治連合会の設立と同時に，事務局も作られました。多くの町内会では，町内会長は1年交替ですから，自治連合会の役員に就任されても会のシステムや組織が分かったころに交替となります。それでは会長をはじめ，役員の方にも大きな負担ですし，会の運営の継続性にも支障が出てくることがあります。そのため，年間の行事を把握し，連合会の事務を取り仕切る事務局を作ることを思いつきました。事務局には，事務局長のほかに事務局員が5名います。全て会長から委嘱されています。平均年齢は40歳代後半です。

「六原子ども夏まつり」を楽しむ子どもたち

自治連合会に事務局ができたことで，学区の行事などで各種団体との調整もそこで行っています。

取組を通して結束を

— 六原学区の取組について教えてください。

成人式は，自治連合会で主催していますが，少年補導委員会に運営をお願いしています。学区で成人式を行うのは，新成人を祝福し，若い方に少しでも地域に関心を持っていただきたい，と考えてのことです。若い方に地域に愛着を持ってもらいたいので，すべて手作りで行っています。

そのほか，六原学区には「六原子ども夏まつり」「六原フェスタ」という2つの大きなイベントの柱があります。夏まつりは基本的に各種団体が中心となって取り組んでいます。子どもたちの夏休みの思い出づくりに，学校に泊まらせていただいています。晩御飯も子どもたちの手作りで，石油缶をかまど代わりに，炊き出しも行います。実は，これが炊き出し訓練にもなっています。災害が起こった場合，子どもも地域のために戦力になる可能性があります。そのときに備える意味で，経験することは大切なことだと考えています。

フェスタは町内会を中心に運営していただいています。これは，学区の町内会にこぞって参加していただきたいからです。イベントを実施する過程で結束が生まれ，運営する側の楽しさなどを多くの方に知っていただけると思っています。ひとつのイベントをするにしても，それに向けてどういった方法を考えるか。その中でチームワークや結束が生まれてきます。

⑬ 南区吉祥院学区の取組

あいさつは心と心のコミュニケーション

野村会長（取材風景）

南区吉祥院学区には，田園地帯だったところに工場立地が進み，さらに近年は，農地や工場の跡地に大型マンションの建設が続くなど，人口，世帯数ともに増加している地域です。

学区では世代を越えた地域の絆を深めようと，平成17年7月から「あいさつ運動」が始りました。吉祥院自治連合会の野村良博会長に「あいさつ運動」の取組や転入者，若い世代の参加についてお伺いしました。

子どもとのコミュニケーションづくり

— 子どもとのコミュニケーションづくりに力を入れられているとか。

何かにつけて，地域の関係が希薄化しているように思います。子どもがあいさつできないのもそのひとつ。朝，あいさつする，道で出会ったときにあいさつする，これは人としての礼儀の基本だと思います。その基本を子どもたちに伝えたい，大人になっても続けて欲しい，そういう思いで運動を始めました。活動内容はいたって簡単です。吉祥院小学校の東門と西門，洛南中学校の正門に毎朝立ち，そこで「おはようございます」とあいさつするだけです。それ以上のことは言いません。子どもたちにあいさつし，大人たちにあいさつが返ってくる。そんなあいさつのキャッチボールを目指しています。子どもたちの名前までは分からないし，全ての子どもから返事があるとは思っていませんが，地域の史跡めぐりの行事をしたときに，参加した子どもたちから「おっちゃん」と声をかけられました。顔を覚えてくれていたのはうれしかったです。

なにごとも，最初から結果を求めてはいけません。私自身は何もプレッシャーを感じずに取り組みを続けています。

「あいさつ運動」で地域のつながりを

— 地域の皆さんにはどのようにかかわっていただいているのですか？

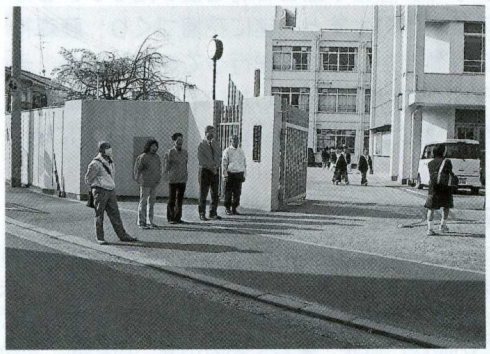
「あいさつ運動」も一人では何もできないので地域全体の取組として，多くの方に参加していただいています。参加していただいているのは60歳代以上の方が中心です。学校まで来られない方には「自分の家の前でお願いします。」と言っています。取組を長続きさせるコツは「できるときに，できる範囲で」です。無理をしないことが肝心です。多くの方に取り組んでいただければ，その分，地域のつながりも広がってくると思います。そのためには，簡単に取り組めて，継続させるのが一番です。

参加してはじめてメリットが出る

— 会長は参加することの大切さを言われていますが。

町内会に加入していない人（世帯）に加入を呼びかけても，「加入すれば何かメリットがあるのか」と尋ねられます。そういう時は，「加入しているだけでは何のメリットもありません。活動に参加して初めてメリットが出てきます。」と答えています。吉祥院学区を活気のあるまちにしたい。そのためには若い方や新しく移ってこられた方の参加が不可欠です。一度，イベントに参加していただけたらおもしろいと感じてもらえると思います。

新しく転入されてきた方は，地域のことで分からないことがあると思います。そんなときは遠慮なく聞いて欲しい。私でも分からないことは聞いています。聞くことは恥ではありません。


あいさつ運動に取り組む皆さん

⑭ NPO法人「京都・深草ふれあい隊 竹と緑」の活動（伏見区）

竹林の再生から始まるまちづくり

伏見区深草にあるNPO法人「京都・深草ふれあい隊　竹と緑」は，深草の竹林の再生を主にしながら，地域の児童，生徒や高齢者などを対象に竹を活用した体験事業などで地域の交流を進め，地域の活性化を目指しておられます。取組内容や目的について，市民参加推進フォーラムの上村憲子委員が，NPO法人「京都・深草ふれあい隊 竹と緑」の杉井正治理事長，志賀真人暮らしの工房管理担当責任者にお伺いしました。

取材する上村委員（左）と杉井理事長（中央），志賀責任者（右）

設立のきっかけ

上村委員　活動を始められたきっかけを教えてください。

杉井理事長　始まりは，平成13年11月に行われた「たけのこ栽培研修農場」です。これは，京都市の東部農業指導所が行った事業で深草の竹やぶを再生し，保全していこうという取組です。夏は，蚊に刺されながら，一生懸命たけのこを育ててきました。このとき研修農場に参加したメンバーが今活動している主なメンバーです。

たけのこを育てるのには竹を間伐しなければいけませんから，間伐材を使って竹の炭や竹細工の制作など「おもしろいことができないか」と活動を始めました。活動を始めてみると多くの方から依頼がきまして，それをきっちりと対応していくためには組織を作らないといけないと思い，3箇月でNPO法人を立ち上げました。

上村委員　竹を使っておもしろいこと，ですか。

杉井理事長　竹を使って活動するには，竹林の保全をしなければならない。簡単に言うと，「たけのこを作り，おいしく食べる」には「竹やぶをきれいにする」という大変な作業が必要だ，ということです。そのため，NPOのメンバーになるには，1年間「たけのこ栽培研修農場」に参加していただいています。研修農場は9月に募集し，80名の方に参加していただいています。

これまで，地域の方と連携して，伏見工業高校産業デザイン科の学生との竹を使ったオブジェ作りや深草中学の生徒と一緒に花壇づくり，藤森神社での「竹あかり」などを行ってきましたが，そういう部分だけ見て参加したいというのは困ります（笑）。私たちの取組を通して，多くの方に地元の自然を大切にし，地域を大切にする心を身に付けて欲しいと思っています。

地域との連携

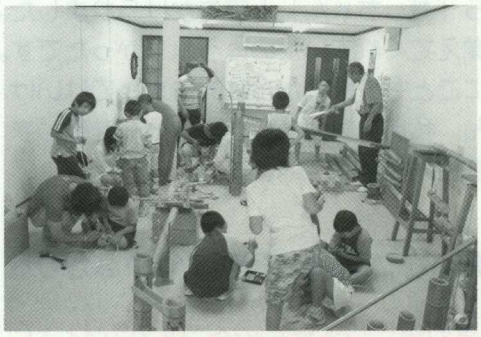
上村委員　藤森神社で行われた「深草 竹あかりの夕べ」は盛況だったとお聞きしましたが。

杉井理事長　藤ノ森小学校の児童さんに点火式にも出ていただいて，地元の子供たちにも地元の竹のよさを分かっていただけたと思います。私たちの活動の中で，子どもたちとのふれあいに力を入れています。

活動に関する情報を発信したい！

上村委員　「活動に参加したい！」と思っても，活動に関する情報がなければ，簡単には参加できませんね。

志賀担当責任者　私たちの活動を知っていただくためにどうすればよいか，正直困っています。私たちの活動は地元の竹を題材に地域に根ざした活動を目指していますので，多くの方に活動を知って欲しいと思っています。



深草暮らしの工房でのイベント

取材を終えて～上村委員の感想～

「“おいしいたけのこが食べたい。”それには竹林の整備をしないと…。」という思いから，「竹と緑」の方々は，仲間と手をつなぎ，地域の農家とも協力して，まるで夏の太陽をめざして真っすぐにしっかりと伸びる竹の青い幹のように活動を伸ばして来られました。ぬくもりを感じさせる作品に囲まれた工房からは，「自分が住んでいるところを，楽しく明るい笑い声が聞こえるところにしたい」というスタッフの願いが，ビンビン伝わりました。また，土に癒されることが環境への取組であり，自然を守る結果となっているとお聞きし，地域活動のはじめの一歩として汗を流したくなりました。

⑮ 北部まちづくり委員会の取組（左京区）

隣り合う地域間の連携で課題解決

左京区の北部まちづくり委員会は，左京区北部の中山間地にある5地区（花脊，別所，広河原，久多，百井）の自治振興会の副会長さんを中心に各地区の住民の方によって構成されています。委員会では，過疎化が進行する5自治振興会が共通して抱える「定住」，「教育」，「福祉」などの課題解決に取り組んでおられます。この取組について北部まちづくり委員会の藤井順一委員長，瀧本純庶務にお伺いしました。

藤井委員長（左），瀧本庶務（右）

設立の経過

— 5つの自治振興会が北部まちづくり委員会を作られた経過を教えてください。

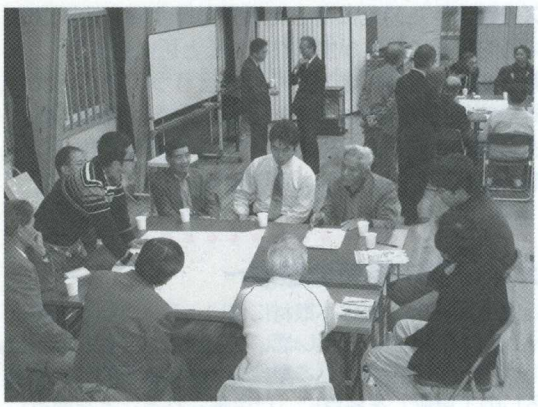
藤井委員長　これまでも5つの地域は一緒になって活動してきました。昔は，百井から別所の中学校に通ったり，別所，花脊，久多，広河原の4中学校で対抗の球技大会もしていました。そういうつながりが今でもあって，5つの自治振興会の共通の課題などを話し合う場として，北部まちづくり委員会が作られました。

まちづくり委員会を作る最初のきっかけは，平成15年にJAの支店の統廃合で生鮮食品が買えなくなったことで，「何とかしないと」といって取り組んだことから始まっています。委員会の下に「買物部会」を設けて，問題の解決に取り組んできました。

部会には，各自治振興会の副会長や地域の皆さんにも集まっていただき，検討を進めていきました。生活に密着した課題でしたので，議論は白熱しましたが，そのことで，地域がまとまっていったと思います。

結果的に美山で移動販売されている業者の方が，花脊峠以北での販売に協力いただくことになり問題は解決しましたが，地域が一つになって課題解決に取り組んだ経験が，まちづくり委員会の財産になっています。

そのほかにも，花背小中一貫校の開設や保育施設の設置に取り組む「子育て教育部会」，地域で介護を受けられる環境を目指す「福祉部会」，久多地域の交通問題解決にあたる「交通部会」と4つの部会を設置してきました。



学校を核とした地域づくり部会のワークショップ

活動内容を知らせたい

— 部会での取組をどのように地域にお知らせしていますか。

藤井委員長　委員会の活動は.広報紙「北やまさとだより」でお知らせしています。5地域のすべての世帯の方に配布しています。少しでも多くの方に地域への関心を持ってもらいたいので，月1回以上，発行するようにしています。

定住化促進に向けた取組

藤井委員長　今後の取組としては，平成19年4月の「花背小中一貫校」の開校を機に，学校と連携したまちづくりを進めようと「子育て教育部会」から発展した「学校を核とした地域づくり部会」を設置しました。「教育」「福祉」の分野は各部会を通して問題解決を図ってきましたが，次の各地域の共通の課題である「過疎」の問題に取り組むためです。

小中一貫校ができたのは良いが，そこに通う生徒を集めたい。当面は，空家・借家・売り地情報や5地域の良さをホームページで発信していきたいと考えています。

⑯ 朱雀ふれあい街づくり協議の取組（中京区）

「暮らしの工房」を中心とした地域づくり

「朱雀ふれあい街づくり協議会」は，朱雀地域の歴史や地域資源を生かしながら，「産業」，「文化」，「観光」，「住みよい環境」，「各世代参加の創造的地域社会」の創生を図るため，朱雀二，四，六の三学区によって結成された組織です。また，協議会のメンバーが中心となって管理運営委員会を立ち上げ，京都市が支援する「中京暮らしの工房館」の運営も行っています。

そこで，市民参加推進フォーラムの安本委員とともに，朱二自治連合会の山岡政一郎会長，朱四自治連合会の青木貞夫会長，朱六自治連合会の岡田耕之祐会長，そして協議会の事務局長であり，工房館の館長でもある木村壽夫さんに，朱雀地域のまちづくりについてお伺いしました。

木村さん（左）と青木会長，山岡会長，岡田会長（奥・左から順に）

朱雀ふれあい街づくり協議会の取組

安本委員　設立のきっかけと活動内容について教えてください。

木村さん　当時，私は自治会とは無縁の人間で，商店街振興組合の役員を務めていたのですが，以前から「これからは，商店街も社会との連携がないと生き残れないのでは」との思いがあり，従来からつながりの強かった三学区が連携したまちづくりをできないかと考えていました。そのようなときに，中京区役所が進める朱雀地域の「新副都心構想」のお話をお聞きし，それに呼応する形で，三学区の自治連合会長の賛同を得て，協議会を立ち上げました。協議会では，3千人の参加者が集まった『「京都新副都心－朱雀」誕生市民フェスタ』や，『朱雀副都心市民マラソン』などを開催しましたが，どのイベントも大変好評でした。

まちづくりを進めるうえでの地域課題

山岡会長　それぞれの学区によって課題は異なると思いますが，朱二学区にある商店街では，商店を維持していく人が少なくなり，賑わいがなくなりはじめています。それと，各学区で共通しているのがマンションなどの集合住宅の住民との交流です。

青木会長　最近は，空き地ができるとすぐにマンションが建つといった状況です。また，自治会活動に理解を示してくれない方もいて，加入の働きかけで苦労することがあります。

山岡会長　なるべく地域や行政の情報は提供するように心がけていますが，それ以上の連携は，なかなか生まれてこないのが現状です。

まちづくりの活動拠点・中京暮らしの工房館

新たな地域の活動拠点「中京暮らしの工房館」

安本委員　様々な地域課題があるなかで，「暮らしの工房館」はどのような活動を行っているのでしょうか。

木村さん　活動の基本は，「地域をもっと住み良いまちにしたい」ということです。例えば，工房館のメンバーには，パソコンの経験者がいますので，上手に地域の情報を整理することができます。このように，地域活動をお手伝いするような役割を果たしていきたいと思っています。

岡田会長　木村さんをはじめとして，工房館のメンバーが一生懸命活動してくれているので，非常に助かっています。また，工房館を使った様々な催しなども開催してくれるので，人の集まりも良くなってきたように感じます。

木村さん　工房館の管理運営委員会には，多才なメンバーが集っていますが，それも，自治連合会長の皆さんから各方面にお声がけいただいたからです。また，イベントの資金や人集めも非常にスムーズにいきました。非常にありがたいことだと思っています。

これからの地域活動にかける思い

木村さん　最近は，住民同士の助け合いの関係が希薄化してきています。そのような中で，これからの地域活動は，助け合いを前提とした考え方ではなかなか難しいのではないかと思っています。地域には様々な財産があります。商店街もその一つで，地域が中心となって安心安全な食料品を提供するなど，地域ニーズを踏まえた時代に沿った活動を行えば，地域活動にも更なる広がりが生まれてくると思います。

岡田会長　地域のまちづくりを行ううえで，行政の果たす役割や責任は大きいと思います。京都の歴史と伝統を大事にしながら，上手に地域のまちづくりを応援して欲しいと思っています。

● 取材を終えて～安本委員の感想～

「朱雀」という美しい名称の学区へ取材に伺い，三人の自治連合会長さんと木村さんのまちづくりへの熱い思いをお聞きし感動しました。地域活動を行ううえで，市役所へ寄せる期待も大きいようです。今後とも，「中京暮らしの工房館」を拠点に，ご活躍されることを期待しています。

⑰ NPO法人「音の風」の活動（東山区）

活動の秘訣は地域の応援

東山区貞教学区にあるNPO法人「音の風」は，高齢者の方や障害を持つ方と一緒に歌を歌う，楽器の演奏をするなどの音楽活動を通して，地域参加や生きがいを生み出す取組を行っておられます。地域と連携を図りながら活動を広めていく方法について，NPO法人「音の風」の西野桂子代表理事にお伺いしました。

西野代表理事（取材風景）

活動のきっかけ

―「音楽」と「福祉」を結び付けられたきっかけを教えてください。

知人の方から老人ホームの慰労の伴奏の手伝いを頼まれたのがきっかけです。私自身は音楽の仕事をしてきて，それまで地域活動の経験はなかったのですが，そのとき，「音楽がこれほど必要にされているのか」ということを実感し，小さなグループを作り，活動を始めました。

活動を始めると直ぐに多くの方から依頼が来ました。それで，多くの方に音楽を届けるには，しっかりした組織が必要だと思い，平成15年にNPO法人を立ち上げました。

ニーズを知る

ほとんどの方は，「音楽のNPOとは何なのか」「自分たちで好きなことを勝手にしているのではないか」と思っておられるのではないかと思います。確かに，私たちは自分が好きなことをしていると思いますが，私たちが本当に必要とされていることを知らないと，単なる善意と思っていることの押し付けになりかねません。私たちが楽しむ以上，それを求められているところに提供していくことが大切だと思います。まずは，ニーズを知ることからはじめようと思っています。

地域とのふれあい

―まず，「ニーズを知る」ですか。

そのためには，地域のことを聞いていろいろな課題を知ることが必要だと思います。その場にいないと分からないことが多いですから。地域に入って本当に必要なことに触れたいと思っています。

地域に入るヒントは

NPOを立ち上げた後，貞教学区に移りました。はじめは地域のことをよく知らなかったもので，学区の「すこやか学級」の演奏者のボランティア登録をしました。そこで学区の社会福祉協議会の方とも連携できるようになり，徐々に活動が広がっていきました。また，それがご縁で，学区の社会福祉協議会の会長にも応援していただけるようになり，どこに行くにも受け入れてもらいやすくなりました。

―そういうNPOの活動に理解してくれる人がポイントかもしれませんね。

貞教学区の夏まつりや他の学区の「すこやか学級」にも参加させていただけ，多くの方の協力や理解もあり，3年ぐらいかけて地域に入っていきました。

平成18年には，障害者の方と一緒に音楽を楽しむ「スマイルミュージックフェスティバル」を東山区社会福祉協議会，京都市東部障害者地域支援センターらくとう，京都市東山青少年活動センターと一緒になって開催しました。この取組を通じて，東山区全体に福祉と音楽のつながりに気づいてもらいたかったからです。また，その取組の中で地域に必要とされる団体でありたいと思っていましたし，その思いから次に発展があると考えていました。その結果，多くの方から，「音の風」は必要だ，という声をいただくようになりました。今では，そんな声に勇気付けられています。

今後，更に地域に根付いていくために，活動の拠点などがあればと考えています。

「スマイルミュージックフェスティバル」での熱演